

浅間山北麓 現地審査報告書（公開版）

【日程】2016年8月21-22日

【現地審査員】

浅野真希（日本ジオパーク委員会委員）
 中田節也（日本ジオパーク委員会委員）
 藤井利衣子（南アルプス日本ジオパーク）

【主な現地対応者（所属）】

熊川 栄（嬭恋村村長 浅間山ジオパーク構想推進協議会会長）
 萩原睦男（長野原町町長 浅間山ジオパーク構想推進協議会副会長）
 下谷彰一（嬭恋村 総合政策課長 浅間山ジオパーク推進室室長）
 中村 剛（長野原町 企画政策課長 浅間山ジオパーク推進室室長）
 宮崎 貴（嬭恋村 総合政策課課長補佐 浅間山ジオパーク構想推進協議会事務局局長）
 萩原喜隆（長野原町 企画政策課 浅間山ジオパーク構想推進協議会事務局次長）
 土屋智美（浅間山ジオパーク構想推進協議会事務局 主任 事務局員）
 坂口 豪（浅間山ジオパーク構想推進協議会事務局 専門員 地域おこし協力隊）
 横山孝之（浅間山ジオパーク構想推進協議会事務局 事務局員 地域おこし協力隊）
 荒井西夏（浅間山ジオパーク構想推進協議会事務局 事務局員 地域おこし協力隊）
 五十嵐亘孝（浅間山ジオパーク構想推進協議会 株式会社プリンスホテル 営業担当）
 黒岩俊明（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員長）
 土屋茂次（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員会 調査・研究副委員長 ジオガイド 山路の会）
 下谷 通（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員会 企画・広報・観光委員長 ジオガイド）
 宮崎光男（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員会 企画・広報・観光副委員長 ジオガイド）
 隈上雅志（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員会 企画・広報・観光副委員長 教育事業担当者）
 下谷 博（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員会 教育・防災副委員長）
 中山邦男（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員会 教育・防災副委員長）
 嶋村 明・湯本善太郎（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員 ジオガイド）
 松本もとみ（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員 ヨガ講師）
 竹渊俊樹・前川みす子・美才治清浩・松本智之（浅間山ジオパーク構想推進協議会 運営委員 教育事業担当者）
 松本牧場店主

【審査日程概要】

<8月21日：1日目>

軽井沢駅 審査員到着，嬭恋村役場，総合インフォメーションセンター，浅間高原ブルワリー（昼食），溶岩樹型，キャベツ畑，鎌原観音堂・嬭恋郷土資料館，北軽井沢観光協会・旧草軽電鉄駅舎付近，地藏川ホテル（宿泊）

<8月22日：2日目>

浅間火山博物館，六里ヶ原，鬼押し出し園，農家レストラン（昼食），嬭恋会館（教育体験，ジオヨガ，講評・意見交換会）

【現地審査のまとめ】

1) 浅間山北麓ジオパーク構想地域の概要

浅間山北麓ジオパーク構想地域は，浅間山山頂から吾妻川までの北側斜面の嬭恋村と長野原町全域を含む地域であり，浅間山火山の噴出物及び吾妻川沿いに露出する先浅間山の地質を含んでいる。特に，天明3年の噴火の噴出物と災害遺構を見所としている。またこれらを中心とした観光業がすでに発達し，それに伴う施設も整備されている。浅間高原の冷涼な環境を利用した農業・酪農作物が豊かである。嬭恋村村長と長野原町長の「未来の子供達のためにジオを根付かせたい」という強い意志のもと，数年間の準備期間を経て日本ジオパークに申請してきた。浅間山南側と一緒に浅間山ジオパーク構想として申請を模索してきたが，北麓だけでも十分なジオの価値が存在し，地域の理解も進んだと判断して申請に踏み切った。この地域は広大な別荘地を抱え，夏場人口が定住者1.5万人を含めて8万人にもなるという地域性があるが，移住者や別荘の住人も積極的にジオパークの活動に参加しつつある。

2) ジオサイトと保全について

近年の噴火で生じた溶岩地形や火砕流台地，火砕流堆積物中にできた「溶岩樹型」，天明3年噴火の災害遺構など，世界的にも価値の高い地質学的遺産が存在する。また，浅間山が噴火活動を開始する前の湖底堆積物や黒斑山が崩壊した時の流山などの貴重な露頭も存在する。地域に6のエリア，38のジオサイト（地形地質以外のサイトも含む）を設けている。溶岩樹型のサイトでは，民間団体（山路の会）による管理や清掃が実施され，来訪者が案内を受け観察できるようになっている。アクションプランとしてジオサイト保全管理計画が立てられているが，国立公園内の管理や上記のような清掃活動などを除いてまだ十分な保全策が取られていないように見受けられる。ジオサイトには流山の露頭やなだれ堆積物中の巨石などがあるが，保全は土地所有者（個人やホテルやゴルフ経営者など）の意向によるところが見受けられる。これらの国立公園地域外の地質遺産の保全について，ジオパーク内での保全の取り決めの合意書を取り交わすなどの方策やそのための計画を立てることが望ましい。

アクションプランの中で，解説板の基本的な考え方，基本デザイン，設置計画を立てている。

7 つある拠点施設においては、ジオパーク全域を示す大地図と各エリアのジオサイトの説明が写真入りで分かりやすく掲示されている。本地域には数少ないながらも掲示板がすでに存在する。そこでは、来訪者の視線を考慮した簡潔な分かりやすい文章の説明看板が用意されている。ただし、ジオパークの入り口にあたる場所にはまだ総合看板や、ジオパークを意識させる案内板の設置が認められない。総合看板を主な拠点施設に設置すると同時に、いくつかのサイトで他機関の既設看板（間違いも含む）との調整が必要である。

3) 教育・研究活動

浅間山の北麓を中心とする地域では、東京大学、日本大学、首都大学東京、駒澤大学、群馬大学などの研究者による長年にわたる地質学・地理学的研究や、過去から現在までの火山噴火の観測に基づく地球物理学的研究などは、国際的にも価値の高いものである。これらの研究者は本ジオパーク構想推進協議会のメンバーやアドバイザーになっており、研究のサポート体制は整っている。ただし、浅間山の活動開始前の地質環境（吾妻川沿いの湖底堆積物や八ッ場ダム予定地付近の地質）に関する研究や、火山の恵みとその価値を理解する上で、火山灰土の発達（噴火史とクロボクなど）に関する研究はまだ不十分であり今後の展開が望まれる。

教育活動は、運営委員会の教育・防災委員会（後述）が担当しながら進めている。小学校では浅間山登山や博物館への野外授業が取り入れられている。嬭恋中学校では総合学習の時間に、浅間山をテーマにした課題授業が取り組まれている。また、本地域の役所や学校に新たに赴任した職員や教員に対しては、ジオパーク講座が提供されている。地域では、教育・防災委員会が中心となった座学や現地視察が行われ、文化祭やお祭りにはジオパークに関する展示が実施されてきている。しかし、スケート授業のように、地域のすべての学校において、ジオパークに関するカリキュラムが導入されるまでにはなっていない。

4) 管理組織・運営体制、ネットワーク貢献について

ジオパーク推進協議会には実働部隊として運営委員会が存在し、3つの委員会（調査・研究、企画・広報・観光、教育・防災）が機能を使い分けて連携している。運営委員会には約60名が参加しており、その中には外からの移住者や別荘住人も含まれている。さらに運営委員会には100名のサポーターが存在する。また、協議会の外に「ジオガイドの会」ができ、運営委員会と連携して活動を開始している。事務局には、事務局長と副事務局長（兼任）を含め6人体制であるが、うち3名が地域おこし協力隊である。このほか浅間園（ビジターセンター）にもサポータークラブが存在する。連携機関の一つである鬼押出し園（プリンスホテル）の管理担当者はジオパークを活用して、地元の良さをアピールする観光に積極的であり、溶岩地形だけでなく氷室など火山の恵みと災害・復興の歴史についてジオストーリーを語るができる。

浅間山北麓ジオパークでは、首長始め事務局および運営委員が、近隣のジオパークだけでなく、いくつもの全国大会・分科会や全国研修に参加してきている。首長は、ポンペイやアイスランドなど主な活動的な火山地域との交流を目標に掲げているが、国内外のジオパークとの連

携という視点はまだ欠けている。拠点施設の浅間園や鬼押出し園においてはジオパークの一般的な掲示があり、事務局がある嬭恋村総合インフォメーションセンターでは全国のジオパークのパンフレットを設置している。今後は、世界ジオパークや日本ジオパークの分布図などの展示を備えた、ジオパークコーナーの設置に期待したい。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズムについて

浅間北麓ジオパーク構想アクションプランのジオガイド制度運用計画に位置付けられて、「ジオガイドの会」が中心になって事務局と共に、エリア内の案内・解説、地域学習の講師などを果たしている。ジオサイトの案内パンフレットは充実されつつある。ガイド養成はまだ行われていないが、地域ごとのモニターツアーなど、これまでに多くのジオツアーを開催した実績がある。また、地域の土地所有や農業の歴史、天明3年の災害と慰霊の歴史、浅間山の植生と地質については、それぞれ、詳しい解説のできるガイドが存在しており、運営委員会やジオガイドの会で中心的な役割を果たしている。ただし、それぞれのガイド内容には専門的に偏りが見られ、このジオパークとしてどのようなジオストーリーを来訪者に何を伝えたいのか、何を持って帰って欲しいのかの目標がまだ十分に議論されていない印象を受ける。

環境省や広大な敷地を所有するプリンスホテルと一緒に、鬼押出し溶岩から舞台溶岩をめぐる優れた景観と醍醐味あるトレッキングコースを作り上げているなど、ジオツアーの具体的なプランをすでに持っている。また、冷涼な浅間高原の環境で育成された乳牛からの乳製品や火山灰土の恵みを活かしたキャベツなどの農産物がすでにジオの恵みとして紹介されており、ジオストーリーを作り上げる上で大きなメリットがある。

6) 国際対応

説明看板の英語表記などを除いて、国際対応がまだ十分になされていない段階である。

7) 防災の取り組み

天明三年の災害の状況がジオパーク全体を通じて語られる場所が多く、ジオパークの中心に防災が位置付けられている。また、国の防災・減災事業としての大きな取り組みが行われる中で、嬭恋村や長野原町の首長を始めジオパーク活動全体が防災の取り組みの啓発的な役割を担当している。浅間山防災協議会ですでに防災マップや避難計画を作っており、浅間園ビジターセンター内でのそれらの掲示や六里ヶ原におけるガイド説明に使われている。将来的には、ジオパークの運営委員会が中心となった避難行動を取れるような仕組みができることが望ましい

8) 結論

国際的価値の高いジオサイトを中心にして、地域が一体となってジオパーク活動に取り組んでいる印象を受けた。火山防災を意識しながら、子供達にジオを根付かせたいという首長の強い意気込みが、住民にも受け入れられはじめており、熱心なガイドツアーや子供向けのイベン

トも展開されている。プリンスホテルなど民間会社との連携も進んでおりジオを地域の資源とした持続的な発展も期待される。今後、浅間山北麓地域が日本ジオパークとして展開することによって、自然災害と防災という観点からも、日本のみならず世界ジオパークネットワークへの貢献も少なくないと考えられる。

一方で、サブテーマが「破壊と再生がつなぐ人々の営み」とあるように、ネガティブな言葉が最初にあり、防災が前面にすぎているきらいがある。本来、ジオパークは自然の恵みを楽しみ学ぶものであるはずである。また、ガイドの説明が断片的で、ジオパーク全体として何を伝え、何を持って帰ってもらいたいのかのジオストーリーがきちんと議論され、紹介されていない。浅間山全体の防災を前面に出すのであれば、北麓だけでなく浅間山を取り巻く全域が一緒になってジオパークとなるのが望ましい。その際、北麓だけが先行し、後から南側を取り込むという考え方は、先行した他地域の例からして、やや無理があると思われる。推進協議会の名前にあるように、もし「環」浅間山ジオパークを近い将来に目指すのであれば、日本ジオパーク申請時点から体制を整備して臨むことを勧める。